郷土の漢文を教材化する
―　淡路の漢詩人 中田南洋　―

令和5年6月4日　全国漢文教育学会
神戸大学附属中等教育学校　岡本　利昭

中田南洋
天明八年一七八八
安政六年一八五九

蜂須賀氏

稲田氏が支城としての洲本城を支配

延享ごろ　益習館

寛政三年（一七九一）～阿波藩校

寛政十年（一七九八）～洲本学問所

初代教官は左の二名

藤江石亭

中田謙斎　石亭の妻は謙斎の姉
謙斎の次男が南洋

右上　中田謙斉顕彰碑（遍照院）
右下　洲本　遍照院
左　藤江石庭の墓（遍照院）

右　中田南洋墓（稱名寺）

左　南洋の母　信墓

田村文石による南洋を追悼する七言絶句

拝先師墓
墓在川傍町称名寺

想到春風和気団
低回欲去涙闌干
清明時節梨花雨
濯向先師墓上寒

『文石余事』所収

南洋を語るには母を語るべき。

南洋母　信墓碑銘

●君中生甚先孝乎午
田名中生篤実哀五
信年先叔之君月
姓生而父成教以■
高洲也君配卒天■
氏不理南母云五卒
幸家洋氏鳴年
謙斉先事二能呼甲

■欠字

篠崎小竹　浪華詩文稿
南洋についての記述

- 自予来遊淡州、与士会中田兄相識有年矣。

則吾先子亦曾与之相識焉、聞其以好学謙恭、事親而孝、特蒙褒賞、抜列教職

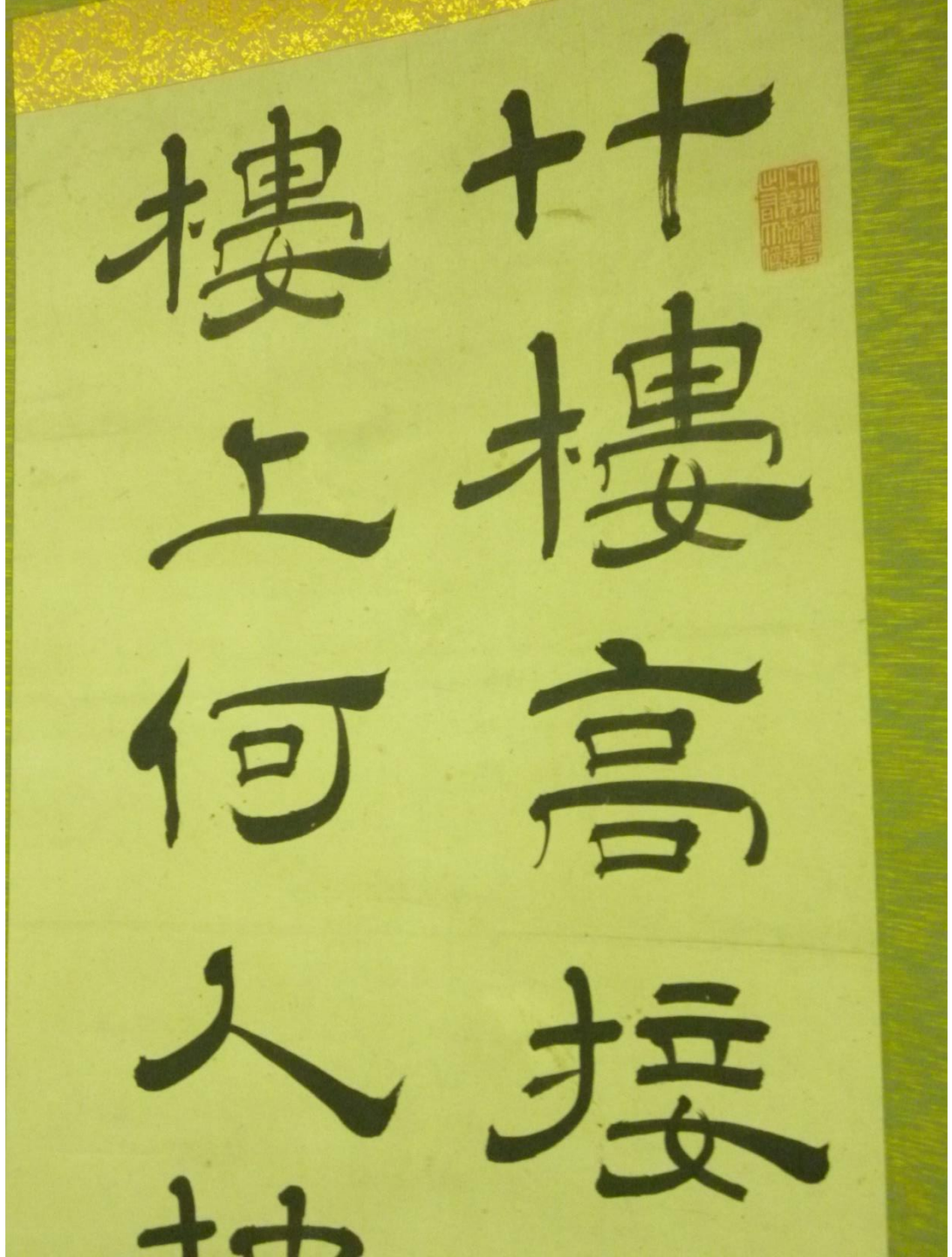
頃聞其以孝養母氏、而終其寿、賞賜金十錠、其妹適某氏、亦以孝其姑、有賜金之賞、

聞士会今齢将五十、而不娶無子、是其或不免乎孟軻氏所謂不孝之大者

兄弟三人、皆終身不娶、聞士会有兄、亦不娶、相与友愛侍奉、使母氏安而終焉。

黒田敏夫氏所蔵　中田南洋　隷書軸
および神農図

黒田コレクションから



隷書の南洋として高名

南洋先生詩稿

七言律
七言絶句
五言絶句

・南洋には、「南洋先生詩稿」という著書が残されている他、掛軸等の美術品もたくさんのこされている。著書には、２５２首の詩が残されている。そしてその題材は、多岐にわたっている。

・詩語集の目次にありそうな「新年」「夜烹茶」「探梅」といった詩も勿論ある。

新年

昨夜東風詞客家
春光粧点筆生花
多年蘊得胸中気
吐作青天一斤霞

だが、いくつか内容的にも数的にも特徴的な詩題に気づくので、紹介していきたい

まず、淡路島各地の風景である。

沼島

十里漁村日下春
浦楼面面度疎鐘
海門暮色秋惨憺
半入禽声半入松

松帆晩望

十里汀沙四面松
●含青籟雑疎鐘
残陽明滅千帆色
散入西溟暮色重

●欠字　虫害

・次に、故事を題材にしたもの。

題老将騎馬図

一剣嘗摩大漠風
霜威不復問雌雄
当年縦使鞍頭老
餘勇猶看絹素中

儒者だが、道教的なもの。　三尸など

鎌倉懐古

鶴岡廟前惨夕暉
英雄割拠事多非
月来華表窟何在
千載空悲丁令威

子供の遊びや子供への言及も散見される

・子どもは居ないが、紙鶴など遊び

紙雀
偶裁片楮象仙鳥
両翮装成未冲雲
此性由来厭鶏侶
如今却入女児群

鶏母鴨雛図

請看鶏母育雛時
卵已生毛何用疑
今古同論人性稟
天然善悪未可知

九日

白衣無復訪寒儒
黄菊蕭条酒一壺
此日猶餘旧風俗
登高何必挿茱萸

その他最も目を引く詩題は女性である。

さらに、女性は、集中の一割近くかなり多い

東隣美女歌

花暖緑濃鳥語深
歌声勾引倚庭陰
春風巧寄情婉思
悩殺男児鉄石心

麗人

自是花顔傾国姿
紅粧何用重蛾眉
巧作●●情艶態
不知今日幾人痴

新婚

華燭明朝喜趨陪
雲鬢蟬鬢曉粧開
最憐偕老百年契
擬把玉簫向鳳台

隣家美人

春風吹送小墻陰
千朶垂花香気深
月底偏通閑雅意
清歌一曲報琴心

見ていくと、儒者としての一面と同時に晩婚（非婚）、独身、少子（無子）などの心情を見て取れる。

母の介護、孤独

子ども、養子を迎えることへの思い。

そして、中高年の恋愛。

・南洋の作品からは、現代日本にも通底する問題を読み取れるようにも思います。

- 中学では、この軸で教材にしました。隷書の南洋ということです。地元で記憶するには、やはり教育からでしょう。
- 石川先生の教科書教材「漢詩の風景」がありましたから、活用いたしました。

・伊藤聴秋の師であり、先程の田村文石の師であります。後年、高木市之助博士が、右のように語っておられます。「国文学五十年」（岩波新書）

そう考えますと、今も大きな影響を国語国文学、漢文学に間接ではありますが、与えているのではないか。

・また、こういう詩人はたくさん、全国にいるのではないか。そういう人物の記憶が、梨袋になっていくのを恐れる次第です。

けれど、さいわい大内兵衛君が、岩波古典文学大系（万葉集・4）の月報の中でわれわれの噂をしてくれている。大内君とは洲本中学に入学して一緒になったんです。それから川路柳虹君が小学校から一緒だった。その三人が仲よしでね。その時分洲本に田村文石という老先生がいて、そこへ三人で和歌を習いに行ったんです。これが私の国文学の芽だったとはっきりはいえない。われわれ三人の共通の芽だったかもしれない。もっとも、一人一人についてみると、後年の詩人がそこから芽を吹いたというのも変だし、まして経済学者がそこから生まれたなどといえばもっと変だが、こんな話もあるんです。私の大学時代の同窓だった千田憲君が、京都女子大学国文学会報30号（昭和四十年一月）に「波の淡路」という随想を書いている。その中で、五高時代の親友としての大内君に言及して、

大内も大学では国文科へ進むような話もして居り……大内は国文志望をやめて新設の経済学部に転じてしまった。

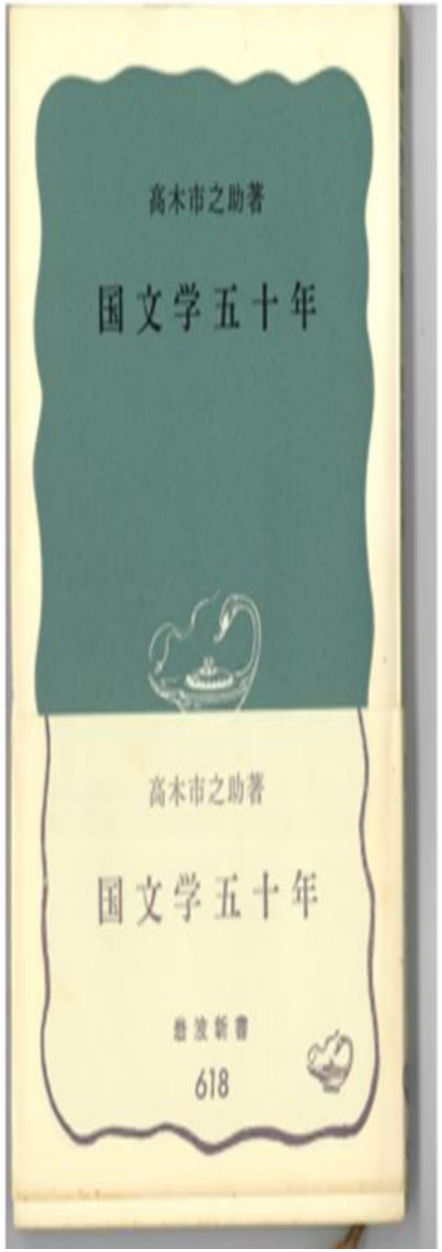
と言っているから、彼の言を信ずれば、大内君だって当時まんざら国文学と無関係だったわけではなく、この中学一年生の時の芽が立ち枯れになったというに過ぎんのかも知れない。それに田村先生自身の中にどれだけ国文学の種子がかくされていたかということだって問題ですよ。先生は、国文学も和歌も昔の国学も何もかも未分化だった世界に生きていたような存在ですか

中田南洋は大きな影響を与えた漢詩人だが、案外、たくさんこのような方がいるのかもわからない。

梨袋というのは

かつて、石川先生が日野にお住いのころ、玉川土手の梨畑の梨に「古文書が虫よけにかけられていた」というお話をされていた。

価値がわからないがゆえに、ごみ同然に詩文が扱われている。

郷土の文人を再顕彰することを通して、埋もれている文化財がむなしく廃棄されてゆくという愚がくりかえされない事を祈念する。

そのためには、学校の教育の中で紹介することが一つの方法ではないか。